

C-3. 「メロンの赤ちゃんができたよ」 小垣江東幼稚園(愛知県刈谷市) <4・5歳児 5月～7月>

雄花と雌花があり受粉をして実ができることを知り、収穫に期待して世話を続けていったりすることができるスイカとプリンスメロンを選んで、一人一鉢親子栽培をしていくことにした。

5月9日 苗植え

K男はプリンスメロンを選び、「おいしいメロンができるといいな。」と期待して、母親と一緒に苗を植えた。

5月19日～5月29日 つるが伸び雄花が咲く

つるが伸びていく2週間くらいはあまり変化も見られなかったが、葉の枚数を数えて増えていくことを喜んだり、つるがいろいろなところから出てくることを不思議に思ったりしながら世話を続けた。並行して、クラス全体の場で、雄花と雌花があることを知らせ、結婚式(受粉)をしないと赤ちゃん(実)ができないことを知らせた。

少しずつ花が咲き始めた。K男は「先生、花が咲いたよ。」と教師に一番に知らせに来た。「すごいね。よく見つけたね。」と発見したことを認め、「お父さんの花かお母さんかどっち?」と尋ねると、広げてあった絵本と比べて、「こっちの花だった。」と雄花を指差した。「そっか。お父さんの花が先に咲いたんだね。お母さんの花は赤ちゃんがついているからね。よく見て探してね。」と話すと、友達と一緒に絵本の雄花と雌花を比べて見ている。

5月30日 プリンスメロンの結婚式(受粉)

1週間ほどすると雌花がつき、母親と登園して雌花を見つけると「先生、お母さんの花が咲いた!」と大きな声で伝えに来た。「よかったね。すぐに結婚式しないとね。」と教師も鉢のところへ行き、母親が受粉してくれるのを一緒に見た。そして、「これでメロンの赤ちゃん大きくなっていくよ。お水忘れないで毎日、お世話してあげてね。」と声をかけると「うん。」と張り切って答えた。



スイカの受粉の様子、プリンスメロンも同じように受粉した。

5月31日 大きくなることに期待して親子で毎日、チェック!

その後も、雌花がつくと母親に知らせて受粉をもらって2個の実をつけることができた。毎朝、母親と鉢を覗き、「ちょっと、大きくなったみたい。」と少しずつ大きくなっていくことを喜んでた。教師はより収穫を期待できるように、「Kくん、プリンスメロンはね、もう食べてもいいよってちゃんと教えてくれるんだよ。」と話すと、「えー、どうやって?」と不思議に思って聞いてきた。「メロンはね、食べごろになると色が少し変わってきて、お尻のほう甘いにおいがするんだよ。それから、ポロツと茎から取れるんだよ。」と知らせると「ふーん。」とわからないような顔をしていた。しかし、近くにいた母親は、「へー、そうなんですか。」と納得していた。40日ほど経って、教師が言ったように、実が白っぽくなり店で売っているものに似てきた。同時に、お尻のほうの匂いを嗅いでみるとプリンスメロンの熟した甘い匂いがした。K男の母親が匂いを発見してK男に伝えると、K男も匂いを嗅いで「本当だ。すごいいいにおいがする!」とうれしそうに答えた。K男はうれしくて近くにいる友達に、「ほら、いいにおいがするよ。」と次から次に友達に声を掛けていた。

7月7日 1個目を収穫・親子で喜ぶ

翌日、メロンが茎から外れてネットの上に落ちていた。K男はプリンスメロンを手にとると、すぐに、匂いを嗅いだ。昨日と同じ甘い匂いがするのを確認すると母親や教師の鼻に近づけ、「いいにおいでしょ。」とにこにこしていた。クラスで一番目の収穫であったので、全体の場で紹介し、みんなで匂いを嗅いだ。「本当だ。メロンの匂いがする。」「いいにおいだね。」「K君いいな。」とみんなから言われ喜んでた。その日、プリンスメロンを持ち帰り家庭で食べた。

翌日、登園してきたK男と母親に味わった感想を聞くと、K男「すごく、おいしかった。」と笑顔で答えた。母親も、「本当に甘くておいしかったです。植木鉢でもちゃんとできるんですね。」と喜んで話してくださった。



実が落ちないようにハンモックのようにネットで支えられてどんどん大きくなる。

ポイント

親子栽培の事例です。毎日の登園時に親子と一緒に観察する中で、保護者自身も自然のすばらしさに感動している様子を保育者が捉えています。その保護者の感動が子どもに伝わり、子どもの興味や喜びを大きくすることにつながっているのではないのでしょうか。